
雪の降る春

うい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の降る春

【コード】

N7670Z

【作者名】

うい

【あらすじ】

恋なんてしたことも無い僕が、恋愛小説を書いてみた。

僕は、暖房が効いて暖かい図書館の、その隅っこの席に座っていた。

いつもの光景だ。

だけど、図書館の外は違った。

「雪……か」

窓の外では、ポツポツと雪が舞っていて、冬なのだと感じさせてくれる。

今日はクリスマス。年に一回の、憂鬱な日だ。

「寒いな……」

暖房の効く部屋の中で厚着をしても、肌寒さは拭えなかった。

ここでこれだけ寒いのなら、外はどれだけ寒いんだろう。

冷蔵庫のような寒さかな？ アイスクリームみたいなフワフワした雪が降ってきて、僕の手のひらで水滴に変わっていくのかな？

なんとなく、そんなことを考えていると、ふいに近づいてくる人影があった。

さつきも言ったけれど、ここは隅っこだ。本も、今じゃ誰も読まない文庫本ばかりが納められている。

「ねえ、まさ君」

人影は、鈴を転がしたみたいなお愛らしい声で、僕のあだ名を呼んだ。

あだ名、と言っても、目の前の人影しか、それを呼ばない。

本から目を上げて、その人影を見る。

幼なじみの女の子、亜美だった。

亜美は僕と同じ厚着をして、更に手袋を着けている。

「今から、家族と食べるケーキを買いたいの。ついてきてほしい」
「うん、構わないけど」

僕は本にしおりを挟んで、わきに抱えた。
そんな僕を、亜美は恨めしそうに睨む。

「別に本を持たなくても」
「借りてるんだよ。それに、僕もそろそろ帰ろうかと思ってたところだし」

亜美をなだめて、カバンを背負った。
カバンの中には、勉強するための道具が一通り入っているが、とてもじゃないが勉強する気にはならなかった。

図書館の自動ドアをくぐって、白く染まり始めている外に出る。

「うう、寒い」

手と手を合わせ、こする。

隣を見れば、亜美も僕と同じ真似をしていた。

「温暖化もアテにならないね」
「そうねえ。私は、もうちょっと暖かってもいいけどね」

談笑しつつ、街中を歩く。

辺りは、クリスマスの装飾で綺麗に飾られていて、宝石の粉をま

ぶしたような美しさだった。

その光景に雪が合わさって、幻想的な世界を映す。

小説の中にあっただ表現なのだが、こつもそれに似合うと、現実じやない気さえしてくる。

カップルが前を横切ったのを見て、僕は少し落ち込んだ。

「いいな、付き合う人がいて」

ボソツと呟いたのだが、亜美には聞こえていたらしく、

「そう？　今の私たちって、なんだかカップルに見えないかしら」

などと、半分はふざけていて、半分は本気のような、どちらとも言い難い調子で言った。

確かにそう見える。

男女が楽しく談笑し、ネオンの輝く街を歩く。

感傷的になりつつ、僕は返答した。

「僕らは、カップルって柄じゃないだろ？」

「幼なじみで、友達だから？」

逆に質問を返された。

なんとも言いにくいことだろう。カップルなんて言われても、亜美とは幼い時からの友達だ。

恋愛、なんて今まで考えたことも無かった。

「私たちって、カップルじゃないのかしら？」

亜美が追求してくる。

モヤモヤした感触が、胸を障る。

亜美と、カップル。僕と亜美が、カップル。

考えれば考えるほど、心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

隠していた物が出てきたような。風船の中にある物が、針の一突きで風船が割れて、飛び出してきたみたいなの、そんな突然な物だった。

いきなりの体の変化に戸惑いつつ、首を傾げてみる。

「カップル……に、見えるね」

曖昧な返事だったのだが、その言葉に亜美はとても晴れやかな笑顔を浮かべた。

鼓動が更に早くなった。どく、どく、と、亜美に聞こえてしまっているんじゃないかと思うほどに。

「じゃあ、公園まで、来て」

まるで、喉でも詰まらせたみたいなテンポの悪い口調で、亜美が言った。

僕はそれに頷いた。

公園についても、相変わらず雪が降っている。

砂場にも白が混ざっていて、積もってこそいないが、積みもりそうだな、とは思った。

公園の真ん中まで歩くと、クルリと亜美がこちらを振り向いた。しかし、何を話すでもなく、もじもじとしたまま両手の指を重ねて動かしていた。

業を煮やした僕は言った。

「どうしたんだい？」

「あ、あのね……」

彼女は、口に出すのを躊躇っているみたいだった。こつなると、根気だ。粘り強く待つしかない。空を見上げて、灰色の雲から降る雪を、一つ一つ目で確認する。今日はホワイトクリスマスになりそうだ。こつという場所で、ただ立っていると、どうにも僕の頭は固いようで、文章として頭に浮かんでくる。

……砂糖を振り撒いたような白い幻想の中で、僕と彼女が二人きり。

彼女は僕に何かを告げようと唇を震わせるが、それしか出来ずに黙ったまま。

鼻に落ちた雪の冷たさに顔しかめて、空を見る。

銀色の世界を作る灰色の雲は、僕たちが立っている地上と違って、単色のつまらない物だった。

僕は彼女と二人きり。

黙った彼女に目を戻す。

どうだろうか。

と、一人小説こつこつをしていると、今僕が置かれている状況を把握できた。

二人きり。クリスマスの日に。雪の中。

もしかして。

「まさ君！」

亜美が、僕のぶら下がった手を掴んだ。

また、鼓動が早くなる。それも、先ほどとは比べものにならないほど。

ああ、どうしよう。心臓が破裂してしまうのではないか。いつそ

のこと、破裂してくれたらどれだけ楽か。

これから起こることを予想してしまった僕は、気の落ち着かない声で返事する。

「な、なに？」

「掴んだ手を持ち上げて、彼女は真っ直ぐに僕を見た。そして、朱に染まる頬を上げて、口を開く。

「好きです」

きっと僕がこんな状況に慣れてさえいれば、もっと格好良くいられたのだろう。

しかし、僕は僕だった。

首から頭のとっぺんまで熱くなって、恥ずかしいみたいな感情でいっぱいになる。

聞き間違いではないか。

「い、今なんて？」

「まさ君が好きです。付き合ってください」

聞き間違いではなかった。聞いた通りの言葉が聞こえた。

いや、一つだけ聞き慣れない単語もあった。

付き合ってください、とは。つまり、亜美と僕がカップルになって、彼女彼女になるということだろうか。

実感こそ、すぐには湧かなかった。

だけど、自分の気持ちだけは主張してくれた。

「僕も、好きです」

マイナス何千度の氷が溶けて、顔を出した気持ちは、すかさず僕の口を乗っ取っていた。

「付き合いたいです」

ふつつつと湧いてくる気持ちは、もう隠せなかった。

目の前の女の子が愛おしい。何よりも。食いつくように見えていた愛読書よりも。

本と比較した自分のポキャブラリーの無さに絶句しかけるが、亜美は僕を抱きしめた。

「ありがとう、まさ君」

人肌の温もりに、僕は一瞬、現実かどうかを確かめた。

自分の顔を自分で引っ張る。

……やはり痛い。

ふざけた僕に、彼女はとても小さく吹き出した。

つられて、僕も笑う。

でも、亜美は笑顔を泣きそうな顔に変えた。

「なんだか、嘘みたい。きつと断られると思ったもん。いつも本ばかり気にして、私は二の次みたいで」

嗚咽のまじった声で、亜美は続ける。

「良かった。本当に良かったよお」

ぐすん、と一息吐くと、亜美は涙を親指の腹で拭き取った。

僕は、涙を流す亜美を、さっきされたように抱きしめた。

亜美の腕も僕の背中にまわって、お互いを抱く。

「ごめんな、亜美」

「ううん。ありがとね、まさ君」

こうして、めでたく亜美は彼女になった。

イルミネーションの輝く街を通り、一つの小さなケーキ屋に入る。クリスマスソングの流れる店内を、亜美はせわしなく動き回る。たまにショーケースを指差しては、

「可愛いね、このケーキ」

と嬉しそうにハシヤぐのだ。

迷い迷って三十分経った頃だろうか、亜美が四角い箱を持って来た。

「これに決めたよ」

どうやら、やっと決まっらしい。

大きなあくびをして、店を出る。

亜美が、眠そうにしている僕の顔を覗き込んだ。

「待たせちゃって、ごめんね。行こっか」

亜美は僕の手を握った。

僕も彼女の手を握り返す。

「そういえばね、昨日、オシャレな喫茶店ができたの。今度一緒に行かない？」

喜々として語る亜美に、僕はウンウンと頷く。

もともと、そういう華やかな話にてんでうとい僕は、会話にあいずちを打つので精一杯だった。

それでも楽しい。

SF小説のクライマックスシーンを読んでいる時とは、また違ったものがある。

「ここで、だね」

T字路にさしかかると、亜美は名残惜しそうに呟いた。

僕だってそうだった。今日でこんな気分が終わってしまうのは嫌だった。

手を離そうとしない二人。

亜美が僕の前に立った。

そして、そっと僕の頬にキスをしたのだ。

何が起きたのか認識する前に、亜美は耳まで顔を真っ赤にして、

「またね！」

と走り去ってしまった。

キスされた頬に触れる。

まだ、亜美の唇の感触が残っている。

「今度は、僕からしてあげないとなあ」

彼女の姿が見えなくなるまで、その走り去った道をじっと見ていた。

雪は降り続ける。

僕の頭の上に降るのと同じく、彼女の上にも。

その日、僕に春が来た。

雪の降る春だ。

(後書き)

完。

リア充は爆ぜろ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7670z/>

雪の降る春

2011年12月25日01時52分発行